

プロジェクト活動報告

1. 研究題目: 「ユーラシア諸国におけるキリスト教受容の比較研究」

2. 研究参加者 (協力者を含む): 井上貴子(大東文化大学)、井上岳彦(札幌学院大学)、松川恭子(甲南大学)、村上志保 (立命館大学)、後藤正憲、高橋沙奈美、望月哲男、森下嘉之 (以上、スラブ・ユーラシア研究センター)

3. 研究活動: 標記のテーマに基づき、インド、中国、ロシアにおけるキリスト教の受容と布教の経緯、とりわけ他の伝統宗教との関係を、各参加者の専門地域について研究し、それぞれの成果を比較検討した。比較検討のためのプロジェクト研究会を、平成 26 年 11 月 15 日(土)–16 日(日)、スラブ・ユーラシア研究センター小会議室(401)にて開催した。報告者、報告テーマ、報告概要は以下の通りである。

①松川恭子は「インド、ゴア州におけるポルトガル支配とキリスト教徒の現在一言語経験を中心に」と題し、ポルトガル植民地経験を有するゴア州の公用語コンカニー語が教会ではローマ字で筆記され、それがキリスト教徒のアイデンティティを象徴するものとみなされるに至ったか、言語にまつわる歴史的経験について報告した。

②井上貴子は「南インドの教会・礼拝・聖歌—土着化と多様化をめぐる—」と題し、聖歌に焦点をあて、インドにおける宣教師の活動実践を西洋化と土着化をめぐる歴史的経験として描き出し、現在の教会における聖歌の多様化を、礼拝における会衆参与と教会への帰属意識の強化による「情緒的共同体」の形成として分析、報告した。

③高橋沙奈美は「聖人崇敬から見るロシアのキリスト教受容の独自性—ロシアにおける成人崇敬の現代的諸相に関する予備的考察—」と題し、「聖痴愚」というロシア正教会の特殊な聖人崇敬のあり方がソ連崩壊後に民衆文化として生き残り、新たな社会的状況下でいかなる変容を遂げているかを「聖クセーニヤ」を事例として報告した。

④井上岳彦は「ロシア帝国のプロテスタント布教—モラヴィア兄弟団とチベット仏教徒の接触を中心に—」と題し、ロシア帝国でプロテスタント布教が戦略的利用のために「承認」され、モラヴィア兄弟団がロシア布教の過程でサレプタ福音兄弟団を設立し、アジア布教の拠点とされる過程について報告した。

⑤村上志保は「中国におけるプロテスタントの拡大と「中国教会」の形成」と題して、近代以降の中国における教会が常に国家の干渉を受け、公認協会に加えて非公認の家庭協会が急成長し、相互に連携を取りながら社会的役割を増大し、民衆のアイデンティティの核となりつつある状況について報告した。

各報告の後、まず討論者の後藤正憲が主に宗教とイデオロギー、信仰と経験の側面から、次に森下嘉之が主に他者性をめぐる問題や社会福祉と教会の役割の側面からコメントし、最後に全体討論を行った。

4. 主な研究成果

本研究会はユーラシア地域大国であるロシア、中国、インドにおけるキリスト教受容の比較研究としては最初の試みである。各国のキリスト教をめぐる状況を把握し、その共通

点と相違点を発見する上で、非常に重要であった。さらに、共通の歴史的経験としては宣教師の活動や国家との関わり、現代の諸問題としては政治体制の関係や教会の社会的な役割をはじめ、問題意識を共有することができた。

5. 今後の展望

平成 27 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「プロジェクト型」の共同研究として「ユーラシア諸国におけるキリスト教受容の比較研究」が採択された。この研究プロジェクトは、平成 26 年度のプロジェクト研究会の成果をふまえ、ユーラシア諸国、主にロシア・中国・インドにヨーロッパからキリスト教がもたらされ、それが各地の信仰生活にいかなる影響を与え、土着の文化の影響を受けていかに変容し定着しているのかを比較分析することを目的とする。今日、ユーラシア地域において大国としての存在感を高める各国の文化の相互比較は重要な課題である。本研究では、「キリスト教の受容」をこれらユーラシア諸国の「共通の経験」として抽出し、それを各国の地域文化の相互比較を可能にする有効な指標として提示するものである。